

## 中井履軒撰『中庸逢原』における「中和」について

藤居岳人

『中庸逢原』は、江戸時代中期の儒者中井履軒による『中庸』研究の集大成である。履軒は当時の大坂に存した懐徳堂を中心に活動していた。彼は「孔子の道を伝える者は、唯だ論語・孟子・中庸の三種のみ」（『孟子逢原』）と述べており、『中庸』に対しては「中庸一篇、蓋し道を論ずるの全備する者なり。故に浅深高卑、有らざる莫し」と高く評価している。この『中庸』に関して、履軒が首章に見える「中和」の概念を重視していることはすでに先学によって指摘されている。本発表では、先学の研究成果を踏まえつつ、「中和」の概念重視の立場からうかがえる履軒の思想の思想史的意義を検討する。

履軒をはじめとする懐徳堂儒者は基本的には朱子学の立場だとされているが、周囲からは「其の学 程朱を信ずること純ならず」（頼春水『師友志』）といわれており、その独自の考えは『中庸』に対する立場からもうかがうことができる。懐徳堂儒者の代表的学説としては「中庸錯簡説」が著名だが、履軒の『中庸』解釈に関しては、「中庸錯簡説」以外に「中和」重視の立場がその独自性を示しているといえる。ただ、この履軒の解釈は、実は古注に見える鄭玄の解釈の方向と同様であり、履軒の立場を思想史的にどのように位置づけるかは問題である。本発表では、この履軒の立場と朱子学的立場との関係について検討する。また、履軒は、「中和」の語の解釈として、朱子学用語である「体用」ではなく「本末」の語を使用している。なぜ「本末」の語を使用するのか。その点からも履軒独自の立場をうかがうことができると考えるが、この問題を履軒が使用する「行」の字を取り上げて検討する。

以上の検討によって、履軒が、より具体的な表現による解釈を通して、人々に学問を勧めるための書としての『中庸』の性質を、より一層浮かび上がらせようとしていたことを明らかにする。